



研究で「時間を思い描く」

村越 敬

動物行動学に詳しい友人から人間と動物を隔てる違いについての議論を聞いた。未だ諸説紛々らしいが、人間だけが「時間を思い描ける」という主張が有力らしい。これは単なる過去や現在、未来の認識することだけではなく、種々の記憶や経験に基づき現在にないことを創造的に思索する能力を指すとのことである。動物も獲物を埋めたり隠したりして後の食料にするなど未来を指向した行動はするが、あくまでそれは現実の延長であって、記憶と知識を総動員して現状にないものを想像したり予測される未来を変えることを求めたりする能力こそが人間の特質であるらしい。

さて、研究とは正に時間を思い描いているということになるかと思う。現状の延長では解決できない課題について、これまでの失敗や試行を情報として全く新しい方法で取り組むことを行う。このとき情報は多彩な方が良い。電気化学会は Science & Engineering がバランス良く調和し、互いに呼応する雰囲気を持つ特徴のある国内でも有数の魅力的な学会であると思っている。その中で北海道支部は会員数が100名ほどで企業会員も少ないものの、構成メンバーの専門はそれぞれ異なり、支部活動を通じた相互刺激がそれぞれの活発な活動を支えている。例えば2010年から開始した7学会（電気化学会・日本分析化学会・日本化学会・触媒学会・腐食防食学会・表面技術協会・石油学会）の北海道支部が共同して運営している冬季支部研究発表会でも、電気化学会のメンバーそれぞれがこれらの学会において横断的な活躍をしている。これは今年で45年になる支部活動の環境創出にご尽力下さった諸先輩方の工夫と現メンバーの努力の賜であるが、今後の益々の発展のためにも新しいアイデアを盛り込んでいかないといけない。

ところで、先程の動物行動学における人間の特質にはもう一つあり、他者との関係性が挙げられるらしい。人間のみが自己の「時間を思い描くことで得られた産物」について、他者と共有することを望み、さらにその結果に喜びや失望を感じる感情が働くとのことである。これが他の動物ではあり得ない高い存在（人口）密度を許容する根源となり、共同体を産み、個体相互の経験や知識の共有が文明の爆発的進展をもたらしたとのことである。従って、近年の情報技術の進展は時間・空間を越えた人口密度のさらなる増大と同義であり、空前の飛躍的進化が始まる前夜であるという楽観的な意見もあるとのことである。しかし一方、過去1万5千年から1万年の間に人類の脳の重量が減少しているのは、労働の分担と社会機能の向上に伴う生活の安定が知能を低下させる証左であり、折角得た人類の能力が過度に群れ集うことによって逆に損なわれつつあるとの警告的意見もあるらしい。

人類の進化に必要な最適環境については未来の結論を待つとして、昨近の情報過多の環境についてはそれぞれ感ずることが多いと思う。特に研究においては各人がよほどしっかりしていないと、時流で変わる官製相場的な研究課題に振り回されることになりかねない。だからといって「人間は時間を思い描く空想的能力によって進化してきており、単なる現状の延長では研究や教育も・・・」などと暢気な発言をしようものなら科学技術政策や組織研究の最前線で戦っておられるリーダー達には「バカ（関西弁ではアホ）」と言われてしまう。本学会の恵まれた環境を生かして、せめてメンバー間は忌憚ない意見の衝突や議論を正面から行いつつ、共有するのは失望でなくその対極にある喜びとして、引き続き革新的なアイデアをお互いに提案・実現して行きたい。



Kei MURAKOSHI
平成27年度 北海道支部長
北海道大学大学院
理学研究院 教授